

……人が暮らす場所から遠く離れた密林の奥深くにその遺跡は存在している。遠い昔からその場所にあるにも関わらず、いまだに正式な調査がおこなわれたことはなく、それどころか名前さえついていないこの遺跡——人々に認識されるようになるずっと以前に放棄され、発見された時にはすでに半ば森にうずもれた状態で朽ちつつあったこの石造りの人工建造物は、これまでに数多くの「いわく」を世に送り出してきた場所としても知られていた。

この遺跡を、いつ、何処の、何者かが造ったのかは定かではない。一説によれば、かつてこの地に栄えていたとされる古代文明の名残りであると言われていたが、それが確認されたことはなかった。地元に残る伝説によれば、この遺跡は古き神を祭る祭壇であり、ここでは毎年のように生け贄が捧げられていたという。生け贄は、そのほとんどが若く美しい女性であって、神に捧げられた彼女たちはその身を犠牲にして神に奉仕したとのことであった。むろん、これらはなんら確証のない俗説に過ぎず、その伝説が確認されたことはなかった。

地元ではこの遺跡とその周辺の土地を「禁断の場所」として認識されているようで、周辺に住む人々は、遺跡のことが話題になると、怯えた様子で、半ば震えた声で同じ言葉を繰り返すのであった。

いわく、

「あの場所には決して近づいてはならない……」
と。

それは古くからの言い伝えであるという。

それらの警告を無視する形で、調査隊が結成されたのはディエゴ暦一九二三年のことであった。考古学を専門とするジョルジョックマシー大学の教授と学生——合わせて二三名が、国に遺跡の調査を申請し、認められ、初めて正式な調査に乗り出したのである。結成された調査団の中には、大学随一の美貌で知られるエマ・トロソンも含まれていた。

調査隊は、ディエゴ暦一九二三年一月二七日に現地に赴き、その一週間後、幾つかの町や村を経由して密林の中へと消えていった。

途中、地元に住む古者から、

